

大学生の授業レポートに見る

教育の課題と希望 第三回

西 伸之

第三回のテーマは、『学校』

第一回は、「他者の考えに触れる／他の学生のレポートを読んで」と「小中時代の道徳授業の思い出」を取り上げました。第二回は、『教師』をテーマに、小中高校時代の教師の思い出や教員志望の動機を紹介する一方、教育現場の目まぐるしい変化と教育格差の拡大、まったく改善されない教員の働き方改革など、教員志望の意欲をそぐマイナスイメージの渦の中で、不安に襲われ自信を失っていく様子や、それでも、「学ぶ喜びを伝えたい」「困っている子どもになりたい」と教育に真摯に向き合おうとする学生たちの姿を紹介しました。

第三回は、『学校』がテーマです。

コロナ1年目の2022年度、全国の小中学生の不登校は19万人（前年比8・2％増）で過去最多になりました。2013年から8年連続の増加です。新潟県も3112人で過去最多です。コロナ感染の影響で学校を休むことのハードルは下がったかもしれませんが、コロナ以前から不登校は増加しており、「コロナのせい」で不登校が増したわけではありません。不登校増加は、学校が楽しい場所ではなくなっているところか、息苦しささえ感じるしんどい場所になってしまっていることを示しています。同僚だった先生たちや、不登校の会で聞く親の声、高校生・大学生の作文やレポート、授業中の高校生の表情などから、それを

強く感じます。

大学生がどんな学校生活を送っていたか、そこで何を感じ、学校にどんなイメージを持つようになったか。授業で取り上げた様々なテーマやエピソードから、自らを振り返り考えた学生たちのレポートをお読みください。

「不登校の子や、行事だけ参加する子はずるい」 という学生の声

小学生の時に普段学校に来られないが、修学旅行や遠足など行事の時は参加する子がいた。先生からは心の病気でなかなか学校に来れないと聞いていたが、当時は、普段の授業は来ないのに特別な時ばかり来てずるいと思うこともあった。

中学生の時に、他クラスに文化祭や体育祭、遠足などの行事だけに参加する生徒がいました。今考えれば、事情があったのだらうと思いますが、当時はずるいと思ってしまっていました。ですが、こう思うのは私がおかしいのだと思い、誰にも言ったことがありませんでした。西先生の「学校が生徒にとってつらい場所に

なっているということだ」というご意見を聞いて、そのような考え方があったのかとすっきりしました。「私はつらくても頑張つて行っているのにどうして休んでいるの？」と思つていた当時の気持ちを違つた視点から考えることが出来てよかったです。今でも、誰かに対して「私はくなの」と思つてしまうことがあります。改めて考えると、自分に余裕がなく、つらいからだと分かりました。

「私はつらくても頑張つて行つていた」「行事や部活だけ参加してずるい」という、不登校児以外の子どもから出される訴えは、『それだけの子にとつても学校がしんどい場所になっている』ということであるという言葉が印象に残った。不登校児がクラスにいた場合は、本人のケアに力を入れたが、登校してきているからといって、子どもたちが学校や友人関係に不安を抱いていないという保障にはならない。学業成績が良かったり、クラスの中心にいたりすると、「この子は大丈夫だろう」と思つて向き合うことを後回しにしてしまいがちである。しかし、先入観を持たず平等に注意を払い、一人一人と信頼関係を築くことで、小

さな悩みでも相談でき、しんどいことはしんどいと言える環境づくりを目指さなくてはならないと感じた。

学校を休む子を「ずるい」と思うのは、「自分だって休みたいのに我慢して登校している」からで、登校している子にとっても学校がつらい場所になっているということですよ。学校は、新しいことを学び自分を鍛える場ですから、しんどいことや嫌に感じることもたくさんあります。しかし、どんなにしんどくても、自分を認めてもらえたり、自分らしく安心していられたら、自分の成長を実感できたりする場であるなら、休む子へのまなざしは、「ずるい」だけではなく、「学校に来られなくて（いろいろ体験できなくて）かわいそう」という思いも生まれるのではないのでしょうか。子どもたちが行きたくなる学校はどんな学校なのか、今の学校はそうなっているかを考えてみる必要があります。

子どものしんどさと「聴く」ことの大切さ

私は小中学校時代に思考停止に陥っていたのかもしれない。なぜなら、他人と思考がずれている、話があ

まり合わないなどの悩みを抱えており、クラスメイトに無理に話を合わせたり（好きでもない恋愛話など）、自分の考えを周りに話すことを止めたりした経験があるからだ。周りの反応が芳しくなく、次第に自分の思考を開示することが怖くなった。だから、小中学校時代の学級での楽しかったというような記憶もなくほとんど無である。

「人に迷惑にならないように」という考え方は非常に共感できた。私自身悩みがあっても、しんどいと感じても抱え込んでしまう。そして、誰かに相談することが相手にとって迷惑なのではないか、自分のやることを少し手伝ってほしくても相手の時間を使ってしまうのは申し訳ないと感じてしまいがちな性格であると感じている。

カウンセラーの先生と話した時のことですが、私は事前に「話を聞いてほしいだけなので」と前置きしました。しかし、そういう仕事なのかもしれません。一つ一つに「じゃあこうしたら？」とコメントをしてくれました。私はそれがあまりうれしくなかったです。

どこかに吐き出すだけで楽になることもあるので、ただ聞くだけでもこちらは十分スッキリすることを理解してほしかったと感じたのを、今日の講義で思い出しました。

私は小さい頃から、たとえば自分が何かに悩んでいても悩んでいるという実感を持たず、また、悩みを人に相談するということが苦手である。そしてそれがいつの間にかキャパオーバーになって突然爆発してしまうということが多い。当時も女子の友人関係のトラブルに頭を抱え、いつの間にか上手く笑えなくなり教室に入るのが怖くなってしまった。そんなとき、いつも良い意味で友達のような仲の良い先生が気にかけてくれ、「なんでも話してごらん」の一言で涙が止まらなくなってしまったことがあった。「うんうん」とただただ聞いてくれるだけで嬉しくて、気づいたらすぐくすつきりしている自分がいた。そのときは何かしてもらおうということを求めている訳でなく、ただ横で話を聞いてくれたという事実がなによりも救いだっただけ。

私は悩みを打ち明けることが苦手な抱え込んでしま

いがちで、中学生の時学校に行きたくないなと思ったこともあった。しかし、担任の先生が放課後話を聞いてくださったおかげで心が軽くなり、自然と嫌な気持ちもなくなっていた。一人でも自分の気持ちに共感してくれる人があるだけでだいぶ心が軽くなり、自分の弱みを出してよいのだと思えるのではないだろうか。

子どもたちは、いろいろな思いを抱えています。つらさや苦しさを率直に表現し誰かの力を頼るのが上手な子もいれば、「大丈夫」とふるまい一人で抱え込んでしまう子もいます。抱え込んでしまう子にとっては、それに気づいてくれる大人（先生）がいるかどうかで、学校への思いが全く違ってきます。

また、悩みを抱えている子に対しての大人の役割は、まず「聴くこと」。この人にならどんなことを話しても受け止めてくれるという安心感の中で、子どもは自分を安心して出し、語るなかで「どうしたらいいか」の答えを自ら見つけ出していきます。どの子も持つ自己回復力を「信じて、任せて、待つ」には、大人（教師）の心のゆとりがとて大切で

教師の反応や対応、叱り方

物語の感想を皆の前で発表して否定された経験が一度あり、その時は、どうして感想なのに否定されるんだ、と少し腹が立った経験がある。それを考えると、教師というのはとても怖い職業だと感じた。自分の一言で一人の人生を左右してしまうかもしれないからだ。……

（先生の反応で）「処方術を学んでしまった」ということがあったが、私もそうであると思った場面が何回かある。子どもは、これを言えば先生は良い顔をしてくれるだろうと大人の顔色をうかがうことができると思う。実際に私も、先生の顔色をうかがって発言することは何回もあったし、ワークシートに書く際も優等生の答えばかり書いていたと記憶している。

修学旅行の体験談の話が授業で取り上げられていましたが、私も小学校の修学旅行で係の仕事を忘れてしまい、全員の前で先生に怒鳴られた経験があります。自分でもやってしまったと思います、先生に謝りに行った際にそのように怒鳴られてしまい、家に帰ってきてか

ら、「修学旅行は楽しくなかった、最悪だった」と感じました。子どもたちの大切な学びの機会にしてほしいからこそ、教師はあえて厳しく生徒に接することもあると思いますが、私は今でもこの記憶はトラウマのように残っています。

私にとって「学校の先生」というのはとても怖い存在でした。数年間連続で私の担任であった先生は、（仮にA先生とします）荒れていた私たちの学級をまとめ上げ、「この学年はすごい」と他の先生や保護者の方々にまで言われるような学年をつくり上げました。ですが、その内実は軍隊そのものでした。私たち生徒がよかれと思ってした行動も、先生にとつて余計なことであつたならば怒られ、だからといって自ら行動しないで立ち止まったままでも怒られる。私は、いつ先生の地雷を踏んでしまうか分からず常におびえていました。特に印象に残っている出来事が、仲良しですつと一緒にいる2人の女の子達に対し、A先生が「すつと2人でくつついて気持ち悪い」とみんなの前で彼女たちを叱ったことです。多分A先生は、「もつと交流の輪を広げようね」という意味で言ったのだと思いますが、

言い方に問題があったように思います。今でもその時の情景をはつきり覚えています。ですが、当時小学生の私は、先生が怖いことなんて当たり前であり、朝がつらいことなんて当たり前、学校行きたくないことも当たり前だと思っていました。ですので、学校に行けなくなるようなことはなく、ただずっと神経を張りつめていたから、家に着いた瞬間、疲れて倒れ込んで寝

ている毎日でした。また、A先生はアメとムチがうまくい方だったので、A先生が嫌いというわけでもありませんでした。むしろ「すごいなあ」と感じていました。これも一種の洗脳のようなものだったなと今では感じます。中学校はさらに厳しくなるのだろうなと覚悟していました。全然そんなことはなく、「えっ、この行動って怒られないの？ 悪いことじゃないの？」と拍子抜けする毎日でした。そこから段々と「朝が辛い」「学校に行きたくない」という感情は薄れていきました。「いい学級」という評価は担任の先生に向けられがちです。先生が褒められる裏側で、生徒たちは我慢していることも知ってほしいなと感じました。もちろん「いい学級」の先生がみんなA先生のような人ではありません。ただ、恐怖で成り立っている学級と信頼

関係で成り立っている学級ならば、絶対に後者の方をつくり上げるべきです。私は中学校で恩師といえる先生に出会いました。そこで本当の「最高の学級」になったと感じています。本当の意味で「いい学級」というのは、生徒の心が豊かかどうかで決まるものではないかと、今回の講義を通して感じました。

「これを教えたい」「こんなことを伝えたい」「こんな子に育てたい」……教師ですからそう思うのは当然ですし、それがなければ教師とは言えないでしょう。しかし、それを「教え込もう」とするあまり、「こうあるべき」と押しついたり、それに当てはまらない考えや行動を頭ごなしに否定したりすることは、教育とは言えませんし、それどころか、子どもたちの心に大きな傷を残すこともあります。また、教師が「伝えたい」と思うことが、道徳的な価値観にかかわるものである場合は、必ずしもそれが正しいとは限らないことを自覚していなければなりません。特に経験豊かな大人が経験未熟な子どもに対する時は、とりわけ気を付けなければならぬと思います。

教師が「教え込み」に走りがちになる一つの原因に、

教えなければならないことが多過ぎるということも忘れてはならないと思います。

教室（集団）の雰囲気

クラスになじめない子どもの映像を見た際、小学生の頃の授業を思い出した。自分の考えを書く時間に、先生が「正解はないから自分の思ったことを書いて」とよく言っていた。しかし、発言したことに對して「その答えはありえない」という雰囲気を出されてしまったら、実際は正解が存在すると子どもは考えるだろう。私は先生の「正解はない」という言葉はあまり信用できないと思っている。「自分の意見を」と言われても、その方向性が想定解と違った場合、映像で語っていた子のように、「その答えはないよ」という空気感になってしまふと思うからだ。そうならないために、人に意見を合わせたり目立たないように演じたりしてしまう人が増えるのではないかと思う。

私が小学生や中学生の頃は、周りの子と違う意見をだすと先生が面白がつて聞いてくれたし、他の子も受け入れてくれて、「確かに。そういう考えができるね」

と言ってくれた。先生や周りの子がつくり出してくれたこの雰囲気が好きだったから、私は他の人と違う意見を持つことは良いことだと考えることができた。

私は、小中学生の頃は、自分の意見を述べることに苦手意識を持っていました。しかし、大学生となった今、あまり苦手意識は感じなくなりました。その変化の要因として考えられるのが、教室という閉鎖的な空間に属しているかいないかだと考えます。昨今、コロナウィルスの影響でオンライン授業が主流となり、意見交流の場は専らブレイクアウトルームです。そこでは顔も、時には名前すら知らない人と意見を交流させます。その人たちとは、授業以外の場で会う可能性が低いので、自分を表に出すのに抵抗がありません。しかし、私は小中学生の頃、小さな小中一貫校に通っていたこともあり、クラスも変わることもなく同じ顔ぶれで9年間過ごさなければなりません。また、低学年の時、クラスの女子で私だけ学童に通っておらず、話についていけないがゆえに、仲間はずれにされたことがあるという経験から、他の子と異なるのを極端に避けたがる生徒でした。そんな私にとって、自分の考

えを表出しなければいけない道徳の授業は苦痛でした。ほかの人と自分の意見が一致すると安心しました。私のような児童生徒にとって、安心して自分を出せる教室とは一体どんな教室なのでしょう。

「自分の意見を受け入れてくれる」「みんなと違っても、嘲笑されたり馬鹿にされたりしない」「自分が大切にされている」、そんな『安心して自分らしくいられる空間』がいまの子どもたちにただだけ必要か。まさに気を遣い、空気を読み、同調圧力の中で疲れ切っている子どもたちの声を聞くたび、切実に思います。

「パーソナルなもの」への軽視

「パーソナルなもの」について考えた時に、小・中・高の教育ではみんなと協調して一緒に生活をして、少しでも人と違くと、それはおかしいと言われ個性が潰されてきた。しかし大学や就活では、個性がないといけない、人と違ふところをアピールしなくてはいけないという風潮がある。急にそんなことを言われても、今までと真逆のことだから戸惑ってしまう。そして社会に出て会社に入ったら、また人と協調して周りとい

緒でなければ冷やかな目が向けられてしまう。非常に難しく生きにくい社会だ。

「パーソナルなもの」の教育は、周囲に流されずに自分自身で判断する力を養う上で重要であることが分かった。同調圧力は私もよく経験したことがある。例えば、中学生の頃に友達全員で同じものを買おうという流れになり、自分の欲しいものとは真逆のものを買った記憶がある。同調圧力は分かっている、仲間意識仲間に嫌われたくないという気持ちから自分の意思を押し殺してしまう。

(にし) のぶゆき・新潟大学教育学部講師

